

中国

GDP (2020年1-3月)

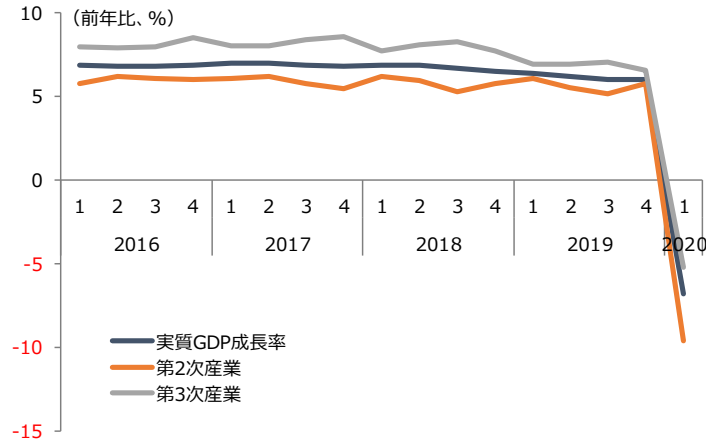
## 20年第1四半期のGDP成長率は公表開始以来初のマイナス

政策・経済研究センター

猪瀬淳也

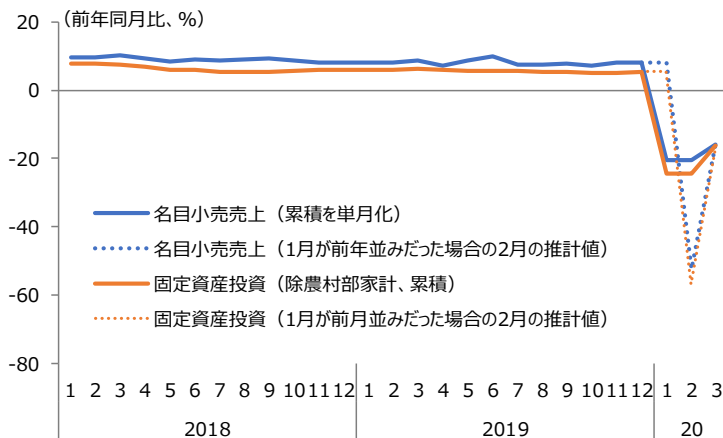
03-6858-2717

## 1 実質GDP成長率と産業別成長率



出所：Windより三菱総合研究所作成

## 2 消費・投資成長率



出所：Windより三菱総合研究所作成

## 評価ポイント

## 今回の結果

- 注目された20年1-3月期の中国のGDP成長率は前年同期比で▲6.8%と、大方の予想通り大幅なマイナス成長となった(図表1)。昨期の成長率が同+6.0%であるため、季節調整前ではあるが今期に▲12.8%下押しされたこととなる。
- 産業別にみると、第2次産業および第3次産業はそれぞれ同▲9.6%、▲5.2%となった。昨期の成長率はそれぞれ同+5.8%、+6.6%であったため、今期の下押し幅はそれぞれ同▲15.4%、▲11.8%となる。
- 消費および投資の動向を見ると、3月の名目小売売上高は▲15.8%となった。1-2月の平均は▲20.5%であったため、その水準よりは若干の回復を見せた。仮に1月の消費水準が例年並みだったとすると、2月の小売売上高は▲50%前後となる。その水準からの比較でいえば、大幅な回復といえる。また投資について、3月の固定資産投資は小売と同程度の落ち込みである▲16.1%となった。(図表3)。

## 基調判断と今後の流れ

- 中国経済の減速は甚大で、徐々に回復を見せつつあるものの予断を許さない状況が続く。
- 中国は、世界で初めて新型コロナによる経済影響を反映したGDPを発表したこともあり、世界から大きな注目を集める指標となった。GDPで約1割(四半期ベース)、小売や投資で約5割(急速拡大期の1カ月間、その翌月は2割程度)の急減速を招くという事実も、今後の世界経済を予測する上で重要な値となろう。
- 中国では足もとで生産活動の回復が強調されている。美団研究院が示した消費額およびサービス活動の回復状況の指数によれば、4月初旬の段階で消費額は50.9%、サービス活動は80.6%程度回復しているとされる。また、招商銀行が算出した夜光指数(夜光工業复工指数)によれば、企業の生産活動も80%程度回復している。
- しかし、急激な活動再開は再び感染拡大をもたらす可能性もあり、今後は第二波も含めた警戒が必要だ。また、新型コロナは今や世界的な問題であり、各国の経済停滞に加え原油や資源といったコモディティ、さらには金融システムの安定性にまで懸念を拡大させている。仮に中国の内需が徐々に回復を遂げたとしても、世界的な景気停滞による成長下押しは避けられない。